

今の時代に日本数式処理学会は？

野田 松太郎

数式処理学会会長， 愛媛大学工学部情報工学科

この度、日本数式処理学会の会長に推挙されました。一松先生と渡辺先生が今までつとめてこられました役職ですので、非常に小粒で学会の会員の方々にも申し訳ないと思いつつです。大学では、独立行政法人化を目前に控え、連日のように中期目標・中期計画等の書類作成や会議に忙殺されています。学会と大学は現在の日本では似たような状況にあります。いずれの学会も会員数の大幅な減少に悩まされています。学会の定義は「学者相互の連絡、研究の促進、知識・情報の交換、学術の振興を図る協議などの事業を遂行するために組織する団体」(広辞苑)とされています。しかし、情報通信技術の発達した現在、相互の連絡や知識の交換等は学会を通じる必要はなくなっています。国際会議も多く開催され、最先端の研究成果を知ること可能です。構成員である「学者」の定義も質も少数精鋭の時代とは大きく違っていることも確かでしょう。

結局は、学会に残された活動として「学問の振興を図る云々」が残るのでしょうか。学会の対象とする学問(私たちでは数式処理)の内容の進化・関連分野への浸透や融合・新しい人材の確保等に一層の力を入れるべきでしょう。現在の研究の一層の発展と、その成果の他分野への注入を通して裾野の拡大を図る努力が必要でしょう。学会として、「これが数式処理だ」と言えるような柱を設定することも急務でしょう。大きな学会では、そのような柱を「標準カリキュラム」として定めています。数式処理学会でも、「数式処理の講義では、このような事項を教育すべきだ」という標準化案程度は作成できるのではないのでしょうか？

国際的視野の確立も学会の活動に加えるべきでしょう。数式処理の研究も、欧米を中心に発達しました。日本に閉じた「研究」では高い評価を得ることは困難です。最近では外国で開催される高いレベルの国際会議への参加者や先端的な外国の大学・研究所に滞在し、研究の質の向上と国際化を図る若手研究者も増えており頼もしい限りです。将来的には、こういう研究者に対するバックアップを図ることも学会の使命の一つかなと思います。

事務局から「学術団体として学術会議から認可がありました」旨の通知をいただきました。ここまで数式処理学会を引き上げていただいた前会長以下多くの方々のご努力に感謝するとともに、数式処理の学問分野の標準化や研究の一層の国際化等の目標を設定して、国内外に日本数式処理学会の名前と実質を広めていきたいと思えます。会員諸氏の一層のご努力を期待します。